

『ハン・ソロ』で進化した『スター・ウォーズ』の  
マイノリティ・キャラクター (1)

—チューバッカとランドー・カルリジアン—

赤 尾 千 波

## 『ハン・ソロ』で進化した『スター・ウォーズ』の マイノリティ・キャラクター (1)

—チューバッカとランドー・カルリジアン—

赤尾千波

### はじめに

現代のアメリカ映画に見るマイノリティ像の多様化には、目を見張るものがある。

かつてアメリカ映画のマイノリティ・キャラクターといえば、白人主人公を引き立てる「わき役の非白人」というのがおきまりであった。歌ったり踊ったりは得意だが、白人主人公の足を必ず引っ張ることになる黒人キャラクター、第二次世界大戦中のプロパガンダ映画に登場する狂信的な日本兵の姿、暗殺者やテロリストなど敵役として登場するアラブ系の人物を例として挙げることができよう。

しかし、近年のアメリカ映画に見る非白人キャラクターは、このような定番のわき役のみではなくなり、各々の個性に焦点を当て、一個人として描かれるものが増加している。同様に、女性や、性的指向によりLGBTQとジャンル分けされるマイノリティの姿もまた、従来のような型にはまった描かれ方を脱しつつある。

変わったのは、描かれ方だけではない。

主人公はじめ主要登場人物のほとんどがマイノリティという映画も増えてきた。例えば、アポロ計画に動員された実在の黒人女性計算手たちを史実に忠実に描いた『ドリーム』(*Hidden Figures*, 2016)、アフリカの架空の国ワカンダの黒人たちの活躍を描くSF映画『ブラックパンサー』(*Black Panther*, 2018)、そして中国系アメリカ人女性とシンガポール人男性の恋愛を描いたロマンチック・コメディ『クレイジー・リッチ!』(*Crazy Rich Asians*, 2018)が代表的である。注目すべきことは、これらの作品が、主要人物ほぼすべてがマイノリティであるにもかかわらず大ヒットを打ち立て、話題を集めたことである。もはや、どのようなジャンルの映画であれ、「白人主人公vs引き立て役・敵役のマイノリティ」という構図は、ヒット作に必須のものではなくなったことが分かる。<sup>1)</sup>

筆者は、アメリカ映画に登場した黒人キャラクターに焦点を当て、人物イメージの変遷を研究し、著書『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ』(2015)にまとめた。また、2018年には、同書出版以降のアメリカ映画に見るマイノリティ像の多様化について、日本でも公開され話題になった作品——『スター・ウォーズ/エピソードVIIフォースの覚醒』(*Star Wars: Episode VII -*

*The Force Awakens*, 2015), および『スター・ウォーズ』アンソロジー<sup>2)</sup>の第一作『ローグ・ワン』(*Rogue One: A Star Wars Story*, 2016) など——に注目して、拙論「最新アメリカ映画に見るマイノリティ像の多様化」にて論じた。今後さらに『スター・ウォーズ』関連映画<sup>3)</sup>を中心に、マイノリティ像について論じていく予定である。

本論では、『スター・ウォーズ』関連映画の最新作『ハン・ソロ』(*Solo*, 2018) を取り上げ、『スター・ウォーズ』の世界に登場する様々なマイノリティ・キャラクターが、この作品に至ってどう変化・発展したのか2回にわたり論じていく。まず、(1) として、大きく様変わりしたキャラクター、チューバッカとランドー・カルリジアンについて詳しく見ていきたい。そして次稿(2) として、その他のマイノリティ・キャラクターについて論じていく予定である。

### 『ハン・ソロ』と『スター・ウォーズ』

まず、キャラクターの紹介を兼ねて最新作『ハン・ソロ』に至る『スター・ウォーズ』関連映画全体を振り返りたい。

『ハン・ソロ』の主人公ハン・ソロは、最初の作品『スター・ウォーズ/エピソードIV』(1977) に、腕利きの宇宙船パイロット兼密輸業者として登場する。彼に随行する副操縦士チューバッカは、身長2メートル強、全身茶色の毛におおわれた怪力の宇宙人である。(写真は、コスプレ大会でのショット。中央がチューバッカで、映画で見る姿とほとんど変わらない。右はソロ、左は後述のレイア姫のコスプレ。)<sup>4)</sup> 二人は、正義の戦いとは無縁の「ならず者」のわき役のはずだったが、帝国軍対反乱軍の戦いに巻き込まれ、反乱軍に加担することになる。ソロとチューバッカは、続く『エピソードV』(1980) と『VI』(1983) でも、反乱軍側の人物として活躍する。



ソロに絡む、もう一人のマイノリティ・キャラクターが黒人男性ランドー・カルリジアンであるが、ソロは、『V』で、友人であるはずの彼の裏切りで囚われの身となってしまう。しかし、『VI』冒頭で、ランドーは、主人公の青年ルーク・スカイウォーカー、チューバッカ、反乱軍の指導者レイア姫と協力してソロを救出。その後は全員、仲間として共に戦うことになる。三部作の最後では反乱軍が勝利し、ソロは、ルークの子の妹であることが判明したレイアと結ばれてハッピーエンディングとなる。この三部作で、ソロとチューバッカという二人のわき役は、主役のルークとレイアを凌ぐほどの人気を博した。

次にソロが登場するのは、『エピソードⅦ/フォースの覚醒』(2015)で、この作品でソロは殺害され、『スター・ウォーズ』の世界から姿を消すこととなる。一方チューバッカは、『Ⅶ』その他、様々な作品で断続的に姿を見せ続ける。年代順に言うと、オリジナル三部作後20年を経て製作された新三部作の3番目『エピソードⅢ/シスの復讐』(2005)、さらに『Ⅲ』の10年後に製作された続三部作の1番目『エピソードⅦ/フォースの覚醒』(2015)、同2番目『エピソードⅧ/最後のジェダイ』(2017)である。<sup>5)</sup> 平均寿命が350年あるいは400年という宇宙人であるため、第一作とほぼ変わらぬ姿で何度も登場するのである。

『ハン・ソロ』は、ソロとチューバッカが登場する最新作品である。この作品はオリジナル三部作の前日譚であり、いわばソロの青春時代が明かされることとなる。生き別れになっていた恋人キーラと再会し、彼女を窮地から救い出そうと奮闘する、というのが基本のプロットである。途中、チューバッカ(当時190歳)や、若き日のランドーとその相棒L3-37(女性のナビゲータ・ドロイド)、黒人女性ヴァルと白人男性トバイアス・ベケットのカップルと宇宙人リオ・デュランから成る三人組の強盗団との出会いが描かれる。さらに三人組の雇い主で犯罪シンジケートのボス、ドライデン・ヴォスや、仮面の女性エンフィス・ネスト率いる謎の強盗団との攻防もあり、物語は冒険大活劇風に展開する。最後には、主だった敵役は滅び去り、ソロはキーラやランドーと別れ、チューバッカと二人だけで新たな旅に出るエンディングとなる。そしてこの旅の目的地が、第一作の舞台となる仕組みである。

『ハン・ソロ』では、ソロ、チューバッカ及びランドーの関わりの経緯が細かく描かれて、その後のエピソードとのつじつまが合っていくのが見どころである。

## オリジナル三部作のキャラクターに変化——改善されたイメージ

先にも述べたとおり、『ハン・ソロ』は前日譚である。そこでは、オリジナル三部作に登場するキャラクターたちが、それ以前はどんな姿であり、お互いの関係はどのようであったかが明かされることになる。オリジナル三部作のキャラクターの中で、『ハン・ソロ』において大きく様変わりしているのが、マイノリティ・キャラクターであり、チューバッカとランドー・カルリジアンである。二人の変容は何を示すのであろうか。

### 1. チューバッカ

チューバッカは、惑星キャシーク出身のウーキー族の男性という設定で、先に述べたように第一作から第九作『エピソードⅨ/スカイウォーカーの夜明け』(2019年公開予定)まで断続的に登場し続けるという息の長いキャラクターである。

ところで、こうした出身地や性別などのキャラクター情報はどのようにもたらされるのか。『スター・ウォーズ』関連作品では、キャラクターのプロファイル（年齢、性別、体格や性格等）が作中で解説されることはほとんどなく、『スター・ウォーズ』公式ウェブサイトとウーキーペディア（『スター・ウォーズ』のオンライン百科事典）、及び『ビジュアル・ディクショナリー』等の解説本において細説される。<sup>6)</sup>

チューバッカのキャラクター情報も、こうした情報源に求めることができる。また、伝記作家デール・ポロックによるジョージ・ルーカス伝『スカイウォーキング』でも、ルーカスが考えていたウーキー族やチューバッカのイメージが読める。まずは、これらの資料から浮かび上がるチューバッカのイメージと、オリジナル三部作における彼の描かれ方を検討していこう。

### 1-1. ルーカス監督が思い描いたイメージとは

#### ——オリジナル三部作のチューバッカ

ポロックによると、「ウーキーは、ルーカスのちょっとした文化人類学的ケーススタディ」であり、監督はチューバッカというキャラクターとウーキーの文化の子細に至るまでを独自に作り上げ、とても気に入っていたという。結局、ウーキーたちの故郷の惑星キャシークでの暮らしや文化は、予算不足により映画で描かれることはなかった。しかし、ルーカスがどのようなイメージを抱いていたかは、ポロックの本を読むとよく分かる。

Amalgams of cat, dog, and gorilla, Wookiees dwell in tribes on a damp jungle planet, occupying inflatable houses set atop giant trees. They live to be three hundred fifty years old, eat meat and vegetables, and are mammals. . . . a primitive patriarchy with a complicated lineage structure, initiation rites, and a religion that rejects materialism. . . . After an Imperial invasion, the Wookiees are rounded by up by slave traders and sold throughout the Empire. Han Solo rescues a group of prisoners that includes Chewbacca, who becomes his lifelong bodyguard and companion. (Pollock, 1999, p.166)

猫と犬とゴリラの混合動物であるウーキーは、はじめじめしたジャングル惑星に住み、巨木の上に膨らませる様式の住居を持つ。平均寿命は350歳で、肉と野菜を食し、哺乳類に属す。(中略) 原始家長制で、複雑な血族構成、通過儀礼、物質主義を否定する宗教を持つ。(中略) 帝国の侵略後、ウーキーたちは奴隷商人によって帝国各地に売り飛ばされた。ハン・ソロはチューバッカを含む囚人グループを救い出し、チューバッカはハンの生涯の友人兼ボディガードとなる。(訳書268-9ページ)

この、動物でありつつ宗教を持ち、ジャングルで家長制のもと家族単位で暮らすというキャラクター・イメージは、現実の、また映画に登場するアフリカ系の人々のステレオタイプ——未

開の地に暮らす、オランウータンやゴリラなど類人猿と人類の中間的存在で、白人より劣位の存在、いわゆる「野蛮人」——と重なる。また、帝国軍が惑星キャシークに侵略してくると、ウーキーたちは奴隷商人によって帝国支配下の各地に売り飛ばされた、というくだりも、実際のアフリカ侵略の歴史と、拉致され、奴隷として世界中に売り飛ばされたアフリカ黒人を連想させる。

そして、なによりもルーカス監督の考え出したチューバッカのイメージを決定づけるのは、故郷から拉致され奴隷として売り飛ばされる、という極限状況にある自分と仲間のウーキーたちを救い出してくれたのがソロであり、命の恩人として彼に感謝し、忠実なボディガードとなることを誓う、というくだりである。これは、黒人男性ステレオタイプの一つであるアンクル・トム（アフリカ人を未開の地から連れ出し、キリスト教化してくれたアメリカ白人に感謝し、生涯にわたり忠犬のごとく仕えようと欲する黒人男性）のイメージと酷似している。また、「白人のお抱え運転手」や「白人のボディガード」は、小説や映画に登場するアンクル・トムの黒人キャラクターの職業としておなじみのもので、宇宙船の副操縦士兼ボディガードという役どころと重なるイメージである。

手短かに言ってしまうと、チューバッカのキャラクター設定は、1970年代アメリカ映画におけるマイノリティ・キャラクターの定番とあってよく、ルーカス監督は話を面白くしようとして、半ば無意識にチューバッカにこのイメージを乗せてしまったのではないかと推察されるのである。

ポロックによると、ルーカスの差別に対する意識は高く、差別についての意見を表明するために宇宙人とドロイドを使おうと考えていたという。彼は、ドロイドを用いた例として、R2-D2とC-3POが人間ではないという理由で酒場に入れてもらえないシーンを挙げて説明している。

他方、宇宙人を用いた例については以下のように説明を試みている。

“Chewbacca’s nonhuman and nonwhite,” Lucas says. “I realize it seems rather obscure and abstract, but it was intended to be a statement.” Lucas claims to be a fervent believer in equality. “I get upset over injustice and inequality,” he says. The robots and Chewbacca were there to demonstrate that no matter how odd or different people seem, they can still be true and faithful friends. This is an unusual form of humanism, to be sure, but Lucas says he was trying to make a point. “A lot of problems could diminish if we realized we’re all the same underneath our costumes,” he says. (Pollock, 1999, p. 213)

ルーカスは言う。「チューバッカは人間でも白人でもない。そのことはかなり漠然として抽象的なようだけれど、ひとつの主張を意図したものなんだ」彼は熱烈な平等主義者であることを力説する。「不正と不平等には怒りを覚える」と言う。ロボッ

トやチューバッカは、人間とは大きく異なった外見であっても誠実な友人となれることを実証したのであった。これは確かに一風変わったヒューマニズムだが、彼は自分の主張を立証しようとしたのだと言う。彼は語る。「誰もが衣装の下では同じだと気づけば、多くの問題が解決するはずだ」(訳書338ページ)

ここで「ひとつの主張を意図」と言っているのは、どう解釈できるであろうか。「自分は、ドロイドや宇宙人に対する差別シーンを描き、その中に現実世界の性差別・人種差別への批判を込めたかった」ということなのだろうか。または、「人間でも白人でもないのだから、そこは我々人間社会の差別意識とは別の次元で考えてもらいたい」と主張しているのか。にわかに判じがたい。

この、多少煙に巻いたような説明を読む限り、ポロックがインタビューした当時、ルーカスはそれほど踏み込んで議論を深めていた、とは考えにくい。ともかく自分は差別主義者ではないということを強調したかったのであろうと思われる。誤解がないように言っておきたい、というエクスキューズとも取れるが、逆にルーカス自身の意識の甘さが垣間見える発言ともいえるのではないだろうか。

ルーカスの意図はともかく、実際にオリジナル三部作を見てみると、チューバッカの立ち位置はソロの従者そのもので、役に立つこともあるが、得てして失敗をしでかしてはソロの足を引っ張る役である。特に、彼がルークやソロのような人間のキャラクターより格下の存在として描かれていることが分かりやすく示されるのは、『IV』の最後のシーンである。ここでは、ルークとソロがその活躍を認められ、壇に上がってレイア姫からその手で栄誉のメダルを首にかけてもらうのに対し、副操縦士として同様に尽力したはずのチューバッカは、壇の下の方に控えたまま、何のメダルを与えられることなく終わるのである。<sup>7)</sup>

## 1-2. 格下から相棒へ——『ハン・ソロ』のチューバッカ

映画『ハン・ソロ』は、本編で人気を得た「有名人」ともいえるソロとチューバッカの出会いの真相がついに明かされる、というので注目された。実際に作品を見てみると、上記のルーカスによる設定とはかなり違った描かれ方であることが分かる。

まず第一に、チューバッカはソロに救出されるわけではない。ソロが脱走兵として捕らえられ、檻に入れられるとそこにはすでにチューバッカが監禁されており、二人はお互いを怪しみ、殴り合いを始める。やがてソロが、“Take it easy. We’re on the same side.”「落ち着け、俺たち立場は一緒じゃないか」と言い、協力して脱走することになる。脱走に成功すると、二人は別々の方向に逃げようとするが、鎖でつながれているためそうもいかないことに気づき、しぶしぶ一緒に逃げることにする。その様子はユーモラスに描かれ、また二人の立場は同等である。

第二に、檻に入れられているのはソロとチューバッカの二人だけであり、捕囚された多数のウーキーがチューバッカと共にソロによって救い出されるという設定ではない。

第三に、脱走した後、チューバッカがソロに感謝してずっと付き従うというストーリーでもない。彼は、脱走後しばらくの間ソロと行動を共にするものの、ウーキーその他の宇宙人や人間が大勢囚われ、奴隷化されていることを知ると、ソロに別れを告げ、一人で救出に向かう。奴隷たちの反乱に加わり、協力したのちチューバッカはソロと合流するが、それは決して「一生ついていくことにしたから」ではなく、その時々での自由な発想によるものである。チューバッカは自分の判断で行動する、自立したキャラクターとして描かれているのである。何より見落としてならないことは、大勢の囚われ人の救出に向かうのは、ソロではなくチューバッカだった、ということである。

このように、『ハン・ソロ』のチューバッカのキャラクター設定は、オリジナル三部作とかなり異なる。はっきりしているのは、彼はソロに対して従属的ではないということである。また、ソロその他のキャラクターが、彼のパイロットの腕を認め、敬意をもって接する場面もあり、犬と類人猿を混ぜたような外見と独特の吠え声<sup>8)</sup>を除けば、ソロをはじめとする人間たちと同列で、ソロと「等しい目線でやりとりする」者として描かれる。作品後半では、お互いへの尊敬と信頼が増していき、まさに相棒の様相を呈していく。

このようなキャラクターの変化は、マイノリティ・キャラクターの描き方が変わってきたことを示すものといえよう。1979年当時、ルーカス監督は、当時としては定番で間違いなく人気が出るはずのマイノリティ・キャラクターの在り方——白人主人公の引き立て役で、何らかの型にはまった人物像——を欲したのに対し、2018年現在の映画においては、そのステレオタイプを脱した姿を描くことこそ求められている、と製作陣が解釈したものと考察される。<sup>9)</sup>

『ハン・ソロ』の製作スタッフの発言は、上記の推論を裏付けるものである。例えば、ロン・ハワード監督は、この作品こそ、チューバッカが個性豊かな一個人なのということと、ソロとチューバッカはお互いがお互いを選んだのだ、ということを理解する良い機会となると言っている。出会いの場面では互いに理解できず反発し合っていたが、その後言葉を交わさずとも相手の胸の内が分かるほどの親しさにまで深まっていく、その二人の絡み合い、丁々発止のやり取りが面白いというのである。

続けて、製作総指揮兼脚本を担当したローレンス・キャスダン<sup>10)</sup>は、「チューバッカがソロに対して従属的 (subservient) ということは全くない」と言い、二人は常に親友でありパートナーである、と強調する。もう一人の脚本担当ジョナサン・キャスダン<sup>10)</sup>の解釈では、二人の関係は、出会ったその時、激しくぶつかり合った二人がやがてお互いを理解し関係を深めていくという、むしろラブコメディの男女のような関係であり、そこが見どころだとも言う。これに続けてチューバッカ役の男優ヨナス・スオタモは、撮影を始める際に、「これはラブストー

リーだ、生涯の関係になるとは思っていなかった二人の人間の」と説明されたという。<sup>11)</sup>

このように見てくると、チューバッカのイメージの改善は、『スター・ウォーズ』映画40年の歴史を経て、「時が与えた」変化とも思えてくる。言い換えれば、伝統的なステレオタイプはもう映画製作に必要ななくなった、ということを示しているのかもしれない。

それでは、もう一人のマイノリティ・キャラクター、ランドーには、どんな時の変化が見て取れるだろうか。

## 2. ランドー・カルリジアン

SF映画といえばB級作品と決まっていたアメリカ映画の世界に登場し、大ヒットした『スター・ウォーズ/エピソードⅣ』は、アメリカ初の「B級でないSF娯楽大作」として、2年後に公開された『エイリアン』(Alien, 1979)と並んで、評判となった。これら2作品は、アメリカ映画に新たな流れを創出したのである。しかし一方で『Ⅳ』は、ものの見事に「白人とドロイドと宇宙人しかいない世界」を描いたというので人種差別的との批判を浴びた。<sup>12)</sup>

当初、ルーカス監督は、ソロだけでなく、ほぼすべての準主役級のキャラクターを非白人俳優に演技させることを考えていたといわれる。主人公ルークを導く老人オビワン・ケノビ役には日本人の俳優、三船敏郎を、レイア姫にもヨーロッパ系とアジア系の混血の女優を考えていた。ソロ役は黒人に演技させるのが妥当と考えた彼は、数名の黒人俳優を面接し、グリーン・ターマンという俳優を選びかけた。しかし、結局は「わたしは『招かれざる客』を作りたかったわけじゃない」と考え直し、取りやめたのだという。(Pollock, 1999, p.151 訳書243ページ)

ルーカスが引き合いに出した『招かれざる客』(Guess Who's Coming to Dinner, 1967)とは、黒人男性と白人女性が結婚しようとして直面する苦難を描いた恋愛映画であり、公民権運動が盛んであった当時、人種差別について考えさせる社会派の映画でもあった。「異人種間の結婚」というテーマを前面に出したことで物議を醸した作品としても知られる。この頃、満を持して『スター・ウォーズ』を世に出す心づもりのルーカス監督にとって、混血女性のヒロインが黒人男性と恋愛するという設定は、あまりに革新的かつ冒険的で、白人観客からの反発を買う恐れがあると判断し、取りやめにしたものと思われる。

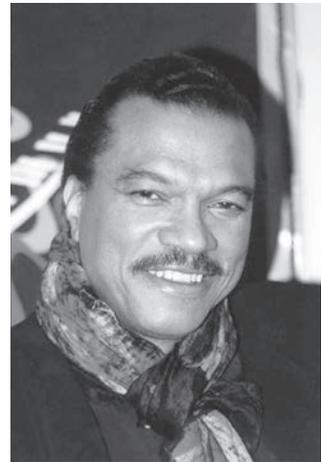
つまり、白人から拒否反応が出ることはないだろうという見込みを最優先にした結果が、全員白人という配役だったのであった。しかしながら、実際に作品が公開されると、今度は非白人及び人種差別反対の方向から、猛烈な批判を浴びせられることになった。そこで、続編2作品の製作が決まったとき、ルーカス監督らは、ぜひとも準主役級に一人は非白人を登場させなければならないと考えたのである。(Pollock, 1999, p.213 訳書338ページ)

こうしてルーカスは、続編で初登場するランドー・カルリジアン役を黒人に演技させること

を決め、ランドーの本拠地であるクラウド・シティの住民と軍隊の半分ほどを黒人に演じさせることにした。<sup>13)</sup>つまりランドーは、白人・非白人どちらからの批判も避けるために、容姿としてはどこから見ても黒人で、キャラクター的には無難を絵にかいたような存在であることが求められていた。それでは、『V』と『VI』に登場するランドーはどのような人物であろうか。

## 2-1. ブラック・トークン——『エピソードV』『VI』のランドー

ランドー役を演じた黒人俳優ビリー・ディー・ウィリアムズ(写真)は、ルーカスからの申し出を最初は断ろうと考えたという。ブラック・トークン(白人しかない世界というのも変ではないか、という批判をかかわすために「いてもらっただけ」の黒人キャラクター)そのものだから、というのがその理由である。先に述べた、製作陣の意向から見れば、全くその通りだったのだが、「白人でも黒人でも演じられる役どころ」だと思い直して、彼は出演を承諾したという。結果として、映画に登場したランドーは、まさに没個性的で無難なわき役に収まったのであった。



そのトークンの「無難さ」とはどのようなものか、詳しく見てみよう。前述したように、『V』でランドーはソロの盟友として登場するものの、帝国軍にソロを突き出す。友を裏切るような真似をする男、という第一印象である。また、レイアと知り合うと、ほれほれとした表情で見つめ、“You look absolutely beautiful!”「それにしても、お美しい！」と言って手を取り、さながら、手の早いプレイボーイそのものといった態で、ソロは「また始まった」とばかりに呆れる。このように、登場したときのランドーは、まるで金目当てでソロを帝国軍と賞金稼ぎに「売る」ことにし、ソロという厄介者を追い払った後はレイアを手元に置き、わがものにしようとする悪者、と見えるのである。

ところが、その「裏切り行為」は、彼が行政官を務めるクラウド・シティの人々を帝国軍の侵略から守るため致し方なくやったことであると、後になって分かる。さらにその後、ランドーはチューバッカたちと共にソロ救出に尽力するので、悪者どころか大変責任感のある男、ということになって名誉挽回を果たす。

また、ソロが囚われている間、ランドーとレイアのやり取り——言い換えると、誘惑する場面や性的ニュアンスを伴う場面——は一切ない。プレイボーイ的に見えたのは恰好だけで、中身は実直な男であることも見えてくる。そもそも、ソロは『V』のクライマックスで捉えられて、『VI』冒頭で解放されるので、2作品の間に何があったかは、割愛されていて観客には分

からないままである。

つまるところ、ランドーは登場シーンでわずかにプレイボーイ的なムードを漂わせるものの、実際には毒にも薬にもならないトークンの役どころに終始した、といえる。そして最初の裏切り行為を償うかの如き大活躍を経てソロとの関係も修復し、最終的には「男の友情」を確かめ合って終わるのである。

## 2-2. セクシュアル・マイノリティのトークン?——『ハン・ソロ』のランドー

『ハン・ソロ』のランドーを特徴づけるのは、パンセクシュアルというセクシュアル・マイノリティのキャラクターとされていることであろう。彼が『スター・ウォーズ』初のセクシュアル・マイノリティの男性キャラクター<sup>14)</sup>となることは、映画公開前から、脚本担当のジョナサン・キャスダンやランドー役の俳優ドナルド・グローバー(写真)によって明らかにされ、大々的な報道もなされ、映画の宣伝にも一役買ったのである。



では、そもそもパンセクシュアル (pansexual) とは、どのような性的指向をいうのであろうか。一般には、相手の性別や性的指向を限定せずに好きになる性質のことを指す。「パン」は全方位、全方向を意味するので、異性愛者も同性愛者もそれ以外の性的指向の持ち主も、すべて自分が好きになる対象となり得る人間をパンセクシュアルな人、という。<sup>15)</sup>

『ハン・ソロ』のランドーは、この定義のさらに上に行く存在ともいえる。なぜなら、彼が愛しているのは、人間ではない。ナビゲータ・ドロイドの女性、L3-37なのであるから。<sup>16)</sup>

そもそも『ハン・ソロ』のランドーをパンセクシュアルと設定した製作陣の意図は、どこにあったのか。この背景として、ハリウッド映画のキャラクターに多様性が欠如している、との批判が高まっているという事情が考えられる。

例えば、2015、16年のアカデミー賞の候補に挙がった俳優がすべて白人であったことは大いに批判されたし、LGBTのキャラクターが少なすぎることへの非難の声も寄せられている。LGBT関連団体GLADD<sup>17)</sup>は、毎年ハリウッドのメジャー・スタジオ7社(『スター・ウォーズ』の製作会社ウォルト・ディズニーを含む)が公開した映画に登場するLGBTキャラクターの統計を発表しているが、2015年にこの7社が全米公開した126本のうち、同性愛者、バイセクシュアル、トランスジェンダーのいずれかのキャラクターが登場した作品は22本(17.5%)で、そのほとんどが端役であったと発表した。特に、パラマウント社とウォルト・ディズニー社の作

品には一人も登場しなかったとして、厳しく迫ったのである。<sup>18)</sup>

『エピソードⅦ』の監督J・J・エイブラムズは、こうした「多様性の欠如」の問題を重く見て、2016年3月、「今後、『エピソードⅧ』をはじめとする『スター・ウォーズ』関連映画には、ゲイのキャラクターが登場する予定」と発表したのであった。<sup>19)</sup>このような背景事情があり、『ハン・ソロ』では、なんとしてもセクシュアル・マイノリティを登場させなければならなかったのである。<sup>20)</sup>

では、具体的に『ハン・ソロ』のランドーについて、製作陣はどのように考えていたのだろうか。ジョナサン・キャスダンは、インタビューに答えて次のように説明する：

There's a fluidity to Donald and Billy Dee's [portrayal of Lando's] sexuality. . . . I would have loved to have gotten a more explicitly LGBT character into this movie. I think it's time, certainly, for that, and I love the fluidity — sort of the spectrum of sexuality that Donald appeals to and that droids are a part of. (Bradley)

「ドナルドとビリー・ディー、どちらが演じたランドーのセクシュアリティにも流動性は、あるのです。(中略) この映画 [『ハン・ソロ』] の中に、はっきりそれと分かるLGBTのキャラクターを登場させられたらいいのに、今こそそれをやるべきだ、と思いました。で、この流動性、僕は好きです。つまり、ドナルドが訴えるセクシュアリティの幅の広さがね。そして、ドロイドは、その一部なんです。」(筆者訳)

キャスダンとしては、子供の時に見た『エピソードⅤ』『Ⅵ』のビリー・ディー・ウィリアムズ演ずるランドーにも性的流動性(性的指向が多様で変化すること)を感じてはいたが、『ハン・ソロ』のランドーについては、より一層はっきりと目に見える形で表現してみたかった、ということであろう。そして、ドロイドに対する恋愛感情を描くことで、その希望を実現したのだと解釈できる。

それでは、当のグローバーは、自分の演じたキャラクターがパンセクシュアルであることについて、どのように思っているのであろうか。彼はインタビューで次のように答えている。

How can you not be pansexual in space? . . . There's so many things to have sex with. I mean, serious. I didn't think that was that weird. Yeah, he's coming on to everybody. I mean, yeah, whatever. He's like having like a '70s swing — yeah. It just didn't seem that weird to me 'cause I feel like if you're in space it's kind of like, the door is open! It's like, no only guys or girls. No, it's anything. This thing is literally a blob. Are you a man or a woman? Like, who cares? Have good time out here. (Bradley)

「宇宙にいて、どうやったらパンセクシュアルじゃなくられるわけ？ (中略) セックスの対象がたくさんあるわけですよ、マジで。私自身は、そういう話、べつにキモイとかは思わなかったよ。うん、彼 [ランドー] は誰彼かまわずその気になるよ

ね。ていうか、何にでも。彼には、〔性的に自由奔放な〕70年代スインガー感覚があるって感じ。とにかくそういうの、変だと感じなかったです。もし宇宙空間にいるとしたら、それって多分、ドアが開いてる！ていう感じかと。つまり、男か女だけ、とかでなくて。そういうんじゃないくて、ほんとに何でもあり、なんだと。これって文字通り、とらえどころのないものだよ。あなた、男、それとも女？みたいな、どうでもいいじゃない？楽しめばいいんだよ。(筆者訳)

ここでグローバーが言っているのは、『スター・ウォーズ』という物語世界では何でもあり、ということなのであろう。男と女しかないわけではないということを強調しているが、さらに読み込むならば、現実世界も同じことで、そもそも男女二元論は空しい、と示唆しているのではないだろうか。また、関係性それ自体も、いわゆる「恋愛」とか「友情」という縛りですべてを表現することはできない、との主張ではないかと思われる。

『ハン・ソロ』を見ると、ランドーのL3-37に対する感情の持ち方が、この新しい関係性を表しているように思える。ランドーとL3-37がお互いに全面的信頼感で結ばれているように見え、さらにはランドーのL3-37に対する庇護欲がさりげなく表現される場面もある。その意味では、オーソドックスな男女の恋愛感情に近い、とも見て取れるが、それ以上に関係は進まず、映画の中で二人の間の性的接触が描かれることはない。<sup>21)</sup>

人間同士の恋愛関係とは異なる感じがするのは、L3-37が攻撃を受け、壊れたあと修復されるくだけである。爆撃で全身バラバラになり、音声フェイドアウトしていくL3-37を抱きかかえたランドーは“I'm so sorry, girl.”「本当にごめんな、お前」と言ってほおずりする。そして、その「死」を悼み、絶望するのである。

しかし、その直後に、彼らの宇宙船は敵に追撃され、L3-37のナビゲートなしで安全なところまで移動しなければならないという非常事態が訪れ、状況は急展開する。とっさにL3-37の生き残った回路を宇宙船に接続してナビゲータ機能を回復させ、脱出することに成功するのだが、このときランドーは、L3-37が宇宙船と一体化しよみがえったのだと実感することになる。そして、ランドー自身も元気を取り戻していくのである。

L3-37の破壊から宇宙船の一部としてよみがえるまでの一連のシーンは、さながらファンタジーの世界で展開する死と再生のドラマを見るようである。L3-37の再生にシンクロして立ち直り、「宇宙船=L3-37」を実感するランドーは、この宇宙船を相棒とも恋人とも違う感覚でとらえ、新しい関係性の中で共に生きていこうと決意しているようにも見える。

\* \* \*

本論では、『スター・ウォーズ』第一作『エピソードⅣ』から39年を経て製作された『ハン・ソロ』に登場するマイノリティ・キャラクター、チューバッカとランドーについて検討した。二人は、時を経てどのように変化したであろうか、またその意味するところは何であろうか。

まず、チューバッカについて見ると、改めて、『Ⅳ』でルーカス監督が描こうとしたイメージは、70年代ならではの人種ステレオタイプの焼き直しであったことが実感される。非白人の登場人物が型にはまった役どころで白人ヒーローまたはヒロインを引き立てる、という演出については、時代錯誤だと認識が広がる時代にあって、ルーカスは非白人引き立て役を宇宙人に挿げ替えたのだといえる。チューバッカはその最初のキャラクターであった。さらに、チューバッカが人気を博したことは、映画の観客もまた、こうした型にはまった引き立て役に違和感を抱くこともなく、むしろ好む傾向にあったことを示している。

時がたち、チューバッカとソロの出会いを改めて描くにあたって、『ハン・ソロ』の製作陣は、この旧態依然とした型にはまったキャラクター描写から脱却すべきと考えたのであった。そして、当初のルーカスのアイデアとは別の出会いを創出し、二人の関係を新たに描き出すことに成功したのである。こうして出来上がったチューバッカのキャラクターは、オリジナル三部作の彼と外見は同じであるし、ユーモラスな感じも変わらない。しかし、大いに違うところが一点、ソロをはじめとする人間と同列の人物としてリスペクトされるキャラクターとなったことである。また、この新しい「頼りになる、尊敬すべき宇宙人」のイメージが、現代の観客に違和感なく受け入れられたことは、映画を観る人が何をもちて面白いと判断するか、その基準もまた変わってきたことを示唆するものであろう。

このようなチューバッカの変化は、アメリカ映画製作者の人種に対する意識が改善された一つの例を示すものであり、キャラクターが「進化」を遂げたと解釈することができる。それでは、ランドーにおける変化もまた進化と解釈できるであろうか。

ランドーに見る「時の変化」は、新しい関係性の提示をもたらしたと解釈することができよう。ランドーとL3-37の関係性は、相手がドロイド（転じて宇宙船）という点で斬新さにかけては群を抜いているだろう。この意味で『ハン・ソロ』は、新しいキャラクター設定により、かつての男女二元論的な考え方を超越した関係性を表現しようとする意欲作、といえるかもしれない。

しかし、そうしたランドーの性的指向がはっきり示される場面があるわけではない。彼がL3-37に対してどんな感情を抱いているか、彼自身の言葉で説明される場面は、ごくわずかである。観客は、L3-37の「好みではない男性（ランドー）に惚れられて困っている」というぼやきと、彼女が破壊されたときのランドーの嘆きぶりと彼女の「再生」に伴う彼の回復ぶりを見て、いわゆる恋愛感情が介在したようだと判断するのである。

この点を踏まえると、かつてオリジナル三部作でランドーがブラック・トークンであったよ

うに、『ハン・ソロ』のランドーもまた、「一人もセクシュアル・マイノリティがない宇宙というのはおかしい」との批判を避けるために「いてもらうだけ」のトークンとしてのキャラクターにとどまった、と考えることもできるのである。

それでは、ランドーの相手役であるL3-37はどのように描かれているのであろうか。オリジナル三部作に登場するドロイドと、彼女をはじめとする『ハン・ソロ』のドロイドは、どのように異なっているだろうか。次稿では、女性とドロイドに注目し、論じていきたい。

## 注

- 1) これら三つの映画には、原作があるという共通点がある。どの原作もベスト・セラーであるため、白人主人公の活躍に焦点を当てたものでなくてもヒットが見込める、ということで映画化されたと思われる。だが、目論見以上の大ヒットとなったので、話題となった。
- 2) 『スター・ウォーズ』アンソロジーの作品とは、いわゆるスピンオフ映画であり、メイン・タイトルの後ろに *A Star Wars Story* と副題がつく。2019年現在で、『ローグ・ワン』と『ハン・ソロ』の2作品がある。
- 3) 『スター・ウォーズ』関連映画作品は、オリジナル三部作（旧三部作ともいう）・新三部作・続三部作の計9作品からなる「スカイウォーカー・サーガ」、アンソロジー作品、そしてTV映画の三つに分類される。
- 4) 以下、写真はすべて [Wikimedia Commons](#) のフリー・ユースのもの。
- 5) 2019年12月公開予定の『エピソードIX/スカイウォーカーの夜明け』にも登場する。
- 6) 公式ウェブサイトと『ビジュアル・ディクショナリー』類の出版は、『エピソードI』、及びCG等で改良を加えたオリジナル三部作特別版の公開に合わせてスタートし、次いで2005年にウーキーペディアが作成・公開された。この二つのウェブサイトは上書きされ、現在ではかつての（問題含みの）プロフィール情報を見ることはできない。書籍 *Star Wars: The Visual Dictionary* (1998) のチューバッカ情報は、『スカイウォーカー』に記されたものと一致している。
- 7) ルーカスが創作した『スター・ウォーズ』のキャラクターで、人種ステレオタイプを彷彿とさせるものは数多い。一番有名なのは、宇宙人ジャージャー・ピンクスである。黒人ステレオタイプのクーン（調子ばかり良く信用できない、愚か者の青年）を連想させるとして、黒人団体等から非難を浴びたが、ルーカスは似せようとしたわけではないと反論し、論争となった。公式ウェブサイトのプロフィールもクーンと酷似するものであったが、のちに、問題含みの記述は削除され、現在見ることはできない。ジャージャー・ピンクスをはじめとする宇宙人と非白人ステレオタイプの関係性については、Akao (2004), Akao (2005), 赤尾 (2009) を参照。
- 8) ウーキーは英語を理解するが、話すのは Shyriiwook または Wookieespeak と呼ばれるウーキーの言語のみである。
- 9) 『ハン・ソロ』に登場するもう一人の宇宙人リオ・デュランもまた、見た目が小ザルのようなが、人間に対して劣位ではないキャラクターとして描かれる。
- 10) ローレンス・キャスダンの息子である。
- 11) ブルーレイ『ハン・ソロ・ボナス・ディスク』「チューバッカ」より。
- 12) 一方『エイリアン』は、アフーマティブ・アクションと女性解放運動を意識して、主人公を宇宙で働く女性とし、また準主役級に非白人を入れることにより「進歩した近未来の宇宙」を演出したことで知られる。
- 13) 実際には、1980年公開の『V』のクラウド・シティの場面に登場する黒人はほんのわずかだった。しかし、シーンを加え、映像に改良を施した『V』特別版(1997)を見ると、様々な人種の住民が見て

- 取れる。両者を比べると、時代によって画面の中にどのくらいの比率で非白人が存在するのが「自然に映る」か、という基準がかなり異なると分かる。
- 14) 女性のセクシュアル・マイノリティのキャラクターとしては、『エピソードⅧ』のホルダーを挙げることができる。『Ⅷ』には描かれないが、Claudia Gray 著の『Ⅷ』関連小説 *Star Wars: Leia—Princess of Alderaan*—(Disney・Lucasfilm, 2017) の中には、彼女の性的指向を示唆する場面がある。
  - 15) Pansexual の定義は、*Merriam-Webster Dictionary* (<https://www.merriam-webster.com/dictionary/pansexual>)
  - 16) L3-37 については、次稿で詳しく論じたい。
  - 17) 旧名称は Gay & Lesbian Alliance Against Defamation (名誉棄損に反対するゲイ & レズビアン同盟)
  - 18) メジャーでない映画会社の作品と TV シリーズに登場するセクシュアル・マイノリティのキャラクターは比較的多いと述べている。詳しくは「同性愛者の擁護団体、ハリウッドに LGBT のキャラクター増加を要請」『映画 .com』 (<https://eiga.com/news/20160513/21/>) 参照。
  - 19) 詳しくは「J・J・エイブラムス、今後の『SW』には同性愛者キャラクター登場と明言」(<https://eiga.com/news/20160301/9/>) 参照。
  - 20) 2019 年 10 月、『スター・ウォーズ』クリエイティブ・チームは、TV アニメーション・シリーズ『スター・ウォーズ・レジスタンス』にゲイのカップルが登場することを明らかにした。詳しくは、「待っていた！『スター・ウォーズ』シリーズに同性カップルが誕生。『彼らは間違いなく、ゲイカップルです』」([https://www.huffingtonpost.jp/entry/star-wars-resistance-gay-couplele\\_jp\\_5d94696fe4b0ac3cddb0ffdb](https://www.huffingtonpost.jp/entry/star-wars-resistance-gay-couplele_jp_5d94696fe4b0ac3cddb0ffdb)) 参照。
  - 21) L3-37 は、宇宙船の中でヒロイン役のキーラに、ランドーとの性的接触について、“It works.” 「やればできる」と言っているが、その気にならない、とも言っている。

## 文献一覧

- Akao, C. (2004). Mammy, Mulatto, and Hot Mama: images of female aliens in Star Wars movies. *Journal of the Faculty of Humanities University of Toyama*, 68, 211-225.
- Akao, C. (2005). The phantom menace of “specieist” characterization—*Star Wars* studies part 2. *Journal of the Faculty of Humanities University of Toyama*, 43, 75-90.
- 赤尾千波. (2009). 映画『スター・ウォーズ』における女性キャラクター. 『黒人研究』, 78, 49-56.
- 赤尾千波. (2015). 『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ』. 梧桐書院.
- 赤尾千波. (2018). 最新アメリカ映画に見るマイノリティ像の多様化—ディズニー実写版『美女と野獣』から『ドリム』までの4作品をめぐる—『富山大学人文学部叢書1 『人文知のカレイドスコープ』. 桂書房.
- Bradley, B. (2018, May 22). *Star Wars* writer confirms Donald Glover’s character is Pansexual in *Solo*. *Huffpost*, Retrieved from <https://www.huffpost.com>
- Howard, R. (Director). (2018). *Solo, a Star Wars story*.
- ハワード, R. 監督『ハン・ソロ本編 / ボーナス・ディスク』 [Blu-ray Disc] ウォルト・ディズニー・ジャパン T4959241772886
- Pollock, D. (1999). *Skywalking: The life and films of George Lucas updated edition*. Da Carpo Rress.
- ポロック, デール. (1999). 『ジョージ・ルーカス伝: スカイウォーキング』. ソニー・マガジンス.

\* 『ハン・ソロ』以外の『スター・ウォーズ』関連映画は、配信サービス「スター・ウォーズ DX」のものを使用。

\* ウェブサイトの最終閲覧日はすべて 2019 年 10 月 20 日。

